

日本とインドネシアの若者による オンライン国際協働プログラム実践報告 —小学校での国際交流活動に関わって—

中 川 真規子

(文教大学教育研究所客員研究員)

Report on Online International Collaboration Program
by Young People in Japan and Indonesia:
Involvement in International Exchange Activities at Elementary Schools

NAKAGAWA MAKIKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

1. はじめに

筆者の所属する特定非営利活動法人地球対話ラボ（以下地球対話ラボ）は、「地球上全ての市民が、お互いを理解し、許容し、尊重し合って生きていく世界」を目指し、日本と様々な国や地域の人々との間に「地球対話」と名付けたテレビ電話等を用いた対話の場を設けることを主に、2002年から活動を続けるNPO法人である。

2012年度以降、東日本大震災によって被災した東北の人々と2004年にスマトラ沖地震と津波によって被災したインドネシア共和国（以下インドネシア）アチェ州にある州都バンダ・アチェ市及びアチェ・バサル県（以下アチェ）を中心とする人々とを、インターネットテレビ電話や相互訪問などで結ぶ国際交流・国際協働プロジェクトを実施してきた。

2021年度、新型コロナウイルスの影響により国内外を問わず移動を伴った活動は難しい状況にあり、「社会貢献に興味があるがその場がない。」「コロナ禍になって人と会うことがほとんどなくなった。」と、コロナ禍で協働的体験の機会が激減していた学生の声聞いた。そこでインドネシアと日本の両国の若者を主体とするオンラインでの国際協働プロ

ジェクトを立ち上げ、2021年8月～2022年3月末にかけて実施した。

本稿はその「日本とインドネシアの若者によるオンライン国際協働プログラム」の活動の柱の1つである「日本とインドネシアの若者による小学校でのオンラインワークショップ実践」について取り上げたものである。

2. 「日本とインドネシアの若者によるオンライン国際協働プログラム」

(1) プログラムの概要

「日本とインドネシアの若者によるオンライン国際協働プログラム」は、コロナ禍で移動が難しい状況にあった2021年、日本とインドネシアの若者（高校生に該当する年齢～24歳程度）がオンラインでミーティングを重ね、子どもたちの国際交流活動をサポートすることを目的として始めたプログラムである。月に2回の定例ミーティングを基本とし、全てオンラインで実施した。メンバー間のやりとりは英語を使う場合もあったが基本的に母語を使用して通訳の方に入ってもらった。ミーティング以外ではSNSのメンバー限定ページの運営やチャット機能を使って連絡を取り合った。ページへの投稿は翻訳アプリを使いな

がら日本語と英語とインドネシア語で投稿し、チャットは基本的には英語、日本語を学習しているインドネシア人メンバーはかんたんな日本語を使って連絡、コミュニケーションを取りあった。

2021年6月からメンバーの募集を行い、日本の全国各地とインドネシア・アチェの各地の若者23名が参加した本プログラムは、活動内容に合わせて第1期～第3期と段階を踏んで構成した。第1期（2021年8月～9月半ば）はメンバー間での「地球対話」の実施やインドネシアの子どもたちとの国際交流を体験するなどして、メンバー同士が交流を深めたり第2期以降の活動のイメージを共有したりする活動を行った。第2期になると第1期で学んだことをふまえ、日本人とインドネシア人の混成チームで準備をし、リモートでのワークショップを小学校で行った。最後の第3期では、若者自身が「地球対話」の企画と運営を担い、国際交流イベントを開催した。メンバーは興味のあるテーマを選び、イベントの展開案を考え、参加者募集を行うなど企画実施に必要な全てを行った¹⁾。

(2) 小学校でのリモートワークショップについて

小学校でのリモートワークショップがどのようなものかを説明する前に、若者たちがサポートする子どもたちの国際交流活動について簡単に紹介する。

若者たちがサポートするのは「東北とインドネシア・アチェの子どもたちによる地球対話プロジェクト」に参加している両地域の小学生の国際交流活動である。「東北とインドネシア・アチェの子どもたちによる地球対話プロジェクト」では、東北にある4つの小学校、インドネシア・アチェにある4つの小学校がペアとなって「地球対話」をするプロジェクトで、互いの暮らしや文化について紹介し合ったり質問し合ったりする。

子どもたち同士の交流前に、交流相手の住んでいる国や街の場所、気候、話されている言語といった基本的な事柄を学ぶワークショップを「地球対話」の事前ワークショップと位置づけた。ワークショップは子どもたちが体験的にインドネシアやアチェについて学ぶことができ、また相手への興味や関心を高めることを目的として実施することとなった。

2021年度、東北側の小学校での事前ワークショップは3校で実施したが、本稿ではそのうちの1校、宮城県気仙沼市立気仙沼小学校でのリモートワークショップに向けた準備と当日の展開を報告する。リモートワークショップの実施当日について、企画と進行を担当する若者たちはリモートで参加した。当団体スタッフは感染対策をしたうえで小学校へ入り、パソコンやモニターなどの事前の機材設定、若者たちのワークショップのサポートを行った。

3. リモートワークショップの準備の様子

(1) グループ・担当テーマ決め

メンバーがリモートワークショップの準備を開始したのは9月末頃である。まず、メンバーをインドネシア人と日本人3～4名の混成グループに分け、1つのグループが1つのテーマを担当し準備を進めるという形を取った。テーマはワークショップを実施する小学校の学習内容や子どもたちの興味関心に合わせたものを小学校の教員と話し合い決定をした。グループ分けと担当テーマは言語やメンバーの興味などに応じて運営側で割りふりをした。

気仙沼市立気仙沼小学校で実施したリモートワークショップのテーマは①インドネシアの基本的な概要（スマトラ沖地震と津波についても含む）②アチェの港や漁業について③イスラム教についての3つであった。

気仙沼小学校では震災復興をテーマにした学習、また地域の特色として漁業や水産業、

海洋に関わる学習を行っていたことから①と②のテーマを選んだ。特に東日本大震災以降、技能実習生として多くのインドネシア人が気仙沼で働き暮らしているが、気仙沼で暮らすインドネシア人を見たことのある日本人はイスラム教徒の女性が身に着ける髪を覆うための布のヒジャブを目にしており、またインドネシアの人口の約87%²⁾、アチェの多くの人々が信仰しているといわれているイスラム教についてを3つ目のテーマとして取り上げることとなった。

(2) ミーティングの様子

9月末から11月初めにかけてリモートワークショップの準備のために定例ミーティングを3回行った。それ以外にもメンバーはチャットのやりとりやグループでのミーティングを設けて準備を進めた。11月6日(土)にはリハーサルを行って互いにアドバイスをし合った。以下では準備ミーティングとリハーサルの内容がどのようなものであったかを記していく。

▼9月18日(土) 定例ミーティング

コロナ禍での子どもたちの学びや学校での国際理解教育について現状の共有を行った。オンラインでワークショップを実施するに当たり参加する子どもたちにとってどのようなよさ、あるいは難しい点があるかということ、自分の学生生活などから考え意見交換をすることで、リモートでのワークショップを企画する際にどんな活動を取り入れるとその課題に対するアプローチになるのかということを考える機会をもった。

▼10月2日(土) 定例ミーティング→グループワーク

グループで準備を進めるにあたっての注意点(連絡方法の確保、通訳者との連絡、ワークショップの目的の再確認など)と今後のスケジュールを確認し合った。その後、各グループに分かれ、ワークショップを実施する学

校や学校のある地域について、運営側から簡単に紹介と質疑応答の時間を取り、グループワークへと入っていた。グループワークではリーダー決めなどをしてリモートワークショップで何をどうやって伝えるかということを話し合った。

▼10月16日(土) 定例ミーティング→グループワーク

一度zoomのメインルームに集合し進捗等を共有した後、各グループでの話し合いの時間とした。子どもたちに伝える内容を決めるに当たり、インドネシア人メンバーがテーマについて全体概要の紹介をするグループもあれば、役割分担をして次回のミーティングで話し合うことを決めるグループなどがあった。

▼10月17日(日)～11月5日(金)

11月6日(土)のリハーサルに向けてグループごとにミーティングやSNSでのやりとりを行った。グループによってミーティングの頻度は異なるが、それぞれ1～2回行った。膨大な情報の中から何をどの程度子どもたちに伝えるかということメンバー間ですり合わせたり、伝える内容を決めた後にそれをどのように体験的な活動にするかを話し合ったりと互いの意見を伝え練り上げるという活動が続けられた。

▼11月6日(土) リハーサル

ワークショップをする側と子ども役で役割を交代しリハーサルを進めた。リハーサルを通して、子どもたちが受け身ではなくワークショップに参加できるような様々な工夫が見られたり、活動に必要な用具が足りないなどの改善点が見つかったりした。リハーサル終了後、約1週間後に控えた本番に向けてさらにミーティングを実施するグループ、最終調整に向けてやることを確認しミーティングの予定を組むグループなど、リハーサルでの指摘を受けて最後の準備を行った。

4. リモートワークショップ当日の展開とふりかえり

(1) リモートワークショップ開始直前

ワークショップの実施時間は学校の授業2コマ分、計100分（10分間の休憩含む）であったが、当日は当団体のスタッフ2名が小学校へ入り、開始1時間ほど前からzoomをつなぐなどして環境設定を行った。環境設定では、教室の後ろまで音声が届いているか、モニターに映る若者の顔がきちんと見えるか、メンバーのインターネット環境に問題はないかなどを確認する。

ワークショップの開始10分ほど前になると学習内容を記録するためのノートや用紙を持った子どもたちが集まってきた。

(2) リモートワークショップ展開

ワークショップの導入として若者と子どもたちの出会い、ワークショップの位置づけや目的、については筆者から説明をし、その後進行を若者たちに渡した（表1）。

まずはインドネシアの基本情報について紹介するグループが、インドネシアの位置、時差、話されている言語、スマトラ沖地震と津波についてなどをスライドショーや映像を使いながら紹介をした。このグループで工夫されていた点は、資料や映像を用い子どもたちに語りかけながら進行を進めたこと、インドネシア語を話してみるという体験活動を入れていた2点にある。

具体的な例を挙げると、インドネシアの位置は気仙沼市から見てどちらの方角にあると思うかイラストや矢印などの記号を使って子どもたちと考えたり、「インドネシアの街の様子を見たことがありますか？」と問いかけ、子どもたちの反応を待ってから映像を流すなど細かなやりとりを織り込み進行をした。

インドネシア語体験では、アチェの小学校とのオンライン交流でも使うことができるような「ありがとう」「またね」といった挨拶

の言葉がインドネシア人メンバーによって教えられた。

2つ目はイスラム教について紹介するグループである。インドネシアには様々な宗教を信じている人たちが暮らしているという全体像、イスラム教の基本的な概要を紹介した後、イスラム教徒の暮らしについて食べ物を切り口に紹介した。メンバーが取り上げたのはハラフードとハラムフードである。初めにメンバーからスライドショーを用いた説明があり、ハラルマークがついている調味料とついていないものを実際に手に取りながら子どもたちはその違いについて考えた。この活動を行うに当たり、事前に当団体スタッフがハラルフードとそうでない食品を机の上に並べておき子どもたちから見えなように布で隠しておいた。そしてメンバーの掛け声に合わせて布を取るというサポートを行った。

3つ目はアチェの港や魚料理についての紹介だ。気仙沼同様アチェも漁業の盛んな地域である。インドネシア人メンバーが事前にアチェの港まで取材に行き、船から魚が運ばれる様子や様々な種類の魚が一面に並べられた魚市場の風景を映像にまとめ紹介をした。加えてアチェの人々がよく食べる魚とその魚を使った料理も紹介された。カツオやサメなど共通の食文化があることや、また全く見たことのない魚が食べられていることなど、気仙沼とアチェを比較しやすいよう、クイズを入れるなどして構成されたワークショップであった。

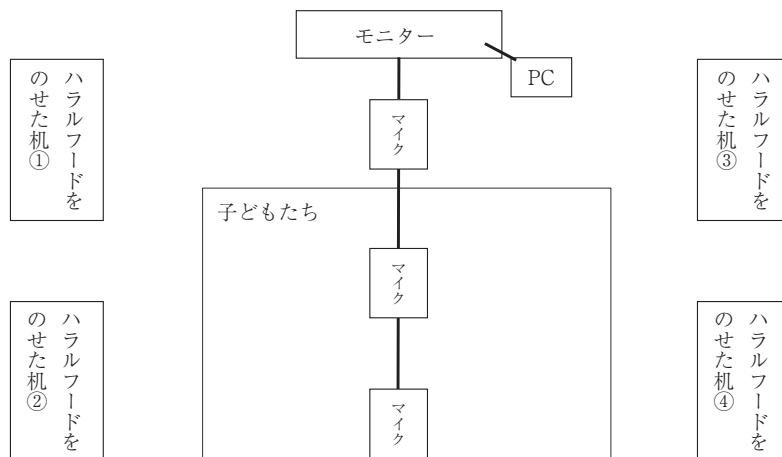
3つのトピックごとに子どもたちからのメンバーへの質問を挟んで進行した。途中10分間の休憩中にも質問のある子どもがマイクの前に立ち、学んだことをさらに深めるという場面も見られた。子どもたちから出た質問は以下のような内容である³⁾。

- ・アチェには避難所とあってあるんですか？
- ・（イスラム教徒が）ハラムフードを食べてしまったらどうなるんですか？

表1 「ワークショップ当日の展開」

時間	活動内容	運営メモ
10:40~ 10:50 10分	① 活動の内容をつかむ インドネシア、アチェについて学ぼう ・zoomWSで学んだ交流のポイントのおさらいをする ▼リアクションを大きくとろう ▼ゆっくり話そう	・9:30にzoom開室。 直前のインターネット/マイク/映像の確認。 ・10:20までに(再)入室しておく
10:50~ 11:10 20分	② インドネシア、アチェってどんな場所? ・インドネシアの位置、気候、言語など基本的なことを知る ・インドネシア語での簡単なあいさつや自己紹介を体験する	・グループの担当部分になったらカメラをオンにする。それ以外の時はカメラ/マイクはオフにする。 ・資料はメンバーが自分で画面共有。映像は小学校側のPCから共有をする。 ・②~④の活動で時間があればその場で質問時間を設けながら進行をする。
11:10~ 11:30 20分	③ イスラム教ってどんな宗教? ・ハラル食品の実物を用意し実際に手に取って観察し学ぶ	・会場の4か所に机を配置し、ハラルの食品を布で隠して置いておく。メンバーの合図で布を取る。
11:30~ 11:40 10分	【休憩】 ・メンバーと自由に質疑応答など ・ハラル食品を観察	・②③の活動で子どもたちがもっと聞きたいと思ったこと、メンバーと話してみたい子どもたちが交流できるようにメンバーは交代で休憩。 ・ハラル食品を置いた机は子どもたちが自由に観察等できるようにそのまましておく。
11:40~ 12:00 20分	④ アチェの港はどんな様子? どんな魚料理を食べているの? ・メンバーが取材をしたアチェの港の様子を映像から学ぶ ・アチェでよく食べられている魚や食べ方についてクイズに答えながら学ぶ	・映像は小学校側のPCから共有をする。
12:00~ 12:20 20分	⑤ Q&Aコーナー ・②③④についてもっと聞いてみたいこと、またそれ以外についても聞いてみよう。 ⑥ 活動のまとめ ・感想交流 ・次回の予告	・次回予告 気仙沼で働くインドネシアの人にインタビューすることを伝える。

【会場図】



- ・マグロやカツオを生で食べないんですか？
- ・ガルーダって何ですか？

5. 終わりに

(1) 活動後のふりかえり

活動終了後、子どもたちにはワークショップでの発見やアチェの小学生とのリモート交流でもっと聞いてみたいことなどを書いてもらった。子どもたちがワークショップから発見したのは以下のような内容である⁴⁾。

- ・インドネシアと色々な国でもつなみは共通語だと知りました。
- ・(アチェは震災遺構として)被災にあった船などを残していること
- ・イスラム教では服装や食べ物などにきまりがあることが分かった。
- ・イスラム教を信じている人は食べられる物と食べられない物があるとわかりました。
- ・アチェではマヒマヒやさめの赤ちゃんが市場にあると聞いてぼくたちになじみがない魚がとれることがわかった。
- ・気仙沼と似ていて、まぐろ・さめ・カツオなどがとれるということ(がわかった)
- ・クママという加工品があるけれど気仙沼にもツナなどの加工品があるから似ていると思った。

また、知りたいことを書く欄には以下のような記述がみられた⁵⁾。

- ・気仙沼とバンダ・アチェで津波以外に似ているところ(を知りたい)
- ・津波が起きた後どうやって復興したのか(を知りたい)
- ・インドネシア語でインドネシア人ともっと交流してみたい
- ・もっとくわしくイスラム教のことを知りたいし、歴史についても知りたいです

リモートでの協働的な活動を通してワークショップを企画・運営したメンバーは準備についてふりかえる中で、リモートで協働して

何かをつくりあげることができののだろうかという戸惑いを感じていたこと、ミーティングを進める中で異文化間で意見をすり合わせて1つのものをつくりあげていくことのおもしろさや日程調整等協働するからこそぶつかる難しさなどを感じていた。そしてワークショップ当日、子どもたちが真剣にメモを取る姿やアクティビティに笑顔で参加する様子、質問のやり取りなど、リモートであっても子どもたちの好奇心や反応に多くの刺激を受け喜びを感じたという。

約3か月の準備期間を経て実施したオンラインワークショップでは、体験を共有したり何かを双方向的に学んだりするのに不向きと思われるオンラインを用いた場合でも、工夫次第で様々な活動を生み出せるということがわかった実践であった。

オンラインでワークショップを実施する場合、特に双方向性や体験活動を盛り込む場合は事前の準備が非常に重要になってくる。実施側が話すだけ、参加者が聞くだけにならないようなアクティビティを考えることもそうだが、参加者側に語り掛けるような話し方をしたり、実施側自身も普段よりも大きく反応をしたりと様々な工夫が必要である。

また、今回体験的な内容を入れるに当たり、小学校側でのPC操作やワークショップに必要な教材等をタイミングよく子どもたちに配布する黒子のような役割でのスタッフ配置も行った。どのタイミングで何をするのかという当日を想定した打ち合わせを積み重ねることが重要である。

メンバー同士のミーティングは行き来ができるのであれば顔を合わせ、実際に現地を訪れ組み立てることが理想なのかもしれない。しかし物理的な移動が伴わなくとも、オンラインプログラムに協働性を埋め込むことでメンバー間での対話を生み出すきっかけとなったと言えるだろう。

一方、個人によって活動に対するモチベー

ションの差が見られたり、時間等の制約から協働的対話的というよりも作業のように活動を進めるグループなどがあるなど、リモートだからこそより綿密なプログラム設計やきめ細やかな対応が必要であったと思われる。こうした課題は今後の実践の積み重ねの中で改善をしていきたい。

2022年9月現在、比較的社会活動や移動の制限が緩和されてきたとは言え、今後もオンラインでの活動は一定の需要を維持したまま、あるいはさらなる実践が積み重ねられ深化をとげていこう。体験的な学びの場として、あるいは社会参画の1つの手段としてのオンラインでの国際協働プログラムの1つの実践として本報告が誰かの力になることを願うばかりである。

-
- 1) 第1期 活動のオリエンテーションについては、中川真規子「日本とインドネシアの若者による国際協働プログラム実践報告—小学校での国際理解教育実践をリモートでサポート」『教育研究所紀要』文教大学教育研究所編30、2021、p.95で報告。
 - 2) 外務省ホームページ「インドネシア共和国基礎データ」(2022年10月13日閲覧)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html#section1>
 - 3) 質問の () 内は筆者による追記。
 - 4) 発見の () 内は筆者による追記。
 - 5) 知りたいことの () 内は筆者による追記。

